



山名会歴史講演会

『山名宗全の虚像と実像』

国際日本文化研究センター助教

呉座勇一先生

平成29年11月26日(日)午後1時～

於：西陣織会館4F「講演会場」



<講師：呉座勇一先生略歴>

1980年8月、東京生まれ。2003年、東京大学文学部卒業。2011年、同大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。同研究科研究員などを経て、2016年10月より国際日本文化研究センター助教。専門は日本中世史。著書に『一揆の原理』（洋泉社）『戦争の日本中世史』（新潮選書・角川財団学芸賞受賞）『日本中世の領主一揆』（思文閣出版）『応仁の乱』（中公新書）。

目次

山名宗全のイメージ.....	3
『塵塚物語』の逸話「山名宗全、或る大臣と問答の事」.....	3
「赤入道」.....	4
実力主義者・秩序破壊者というイメージ.....	5
宗全の野心が応仁の乱を引き起こした。.....	7
応仁の乱の通説的理解.....	7
足利義視と足利義尚の関係.....	8
文正の政変.....	9
山名宗全のクーデター.....	10
御霊合戦.....	11
応仁の乱へ.....	12
山名宗全の実像.....	12
山名宗全の守旧性.....	12
山名宗全の都市性.....	13
和睦交渉と山名宗全.....	14
山名宗全はなぜ和睦を模索したのか？.....	14
山名宗全の切腹未遂事件.....	14
質疑応答.....	16
「応仁の乱」の歴史的意義について.....	16
「享徳の乱」との関係性について.....	17
『義就』の読み方は「よしなり」か？「よしひろ」か？.....	17
東西両陣を渡り歩いた「足利義視」について.....	17
戦国時代を導いた応仁の乱、政治と宗教.....	18



講演会風景（西陣織会館4F・H29年11月26日・103名参加）

ただ今ご紹介に預かりました呉座です。この度は山名会講演会でお話しさせていただくということで、大変に光栄に思っております。本日は「山名宗全の虚像と実像」という演題で応仁の乱と山名宗全の関りについてお話したいと思っております。

山名宗全のイメージ

さて、山名一族と言いますと、一般的に一番有名なのは山名宗全だと思います。山名宗全というのは皆様ご存じのように、応仁の乱。応仁の乱は東軍と西軍に分かれて戦ったのですが、東軍の総大将が細川勝元、西軍の総大将が山名宗全ということになります。宗全は本日の会場があるこの西陣辺りに陣を構えて戦ったということになります。

そんな山名宗全ですが、実は宗全が活躍していた室町時代やその後の戦国時代のものでも宗全を描いた肖像画というのは残っておらず、江戸時代以降の物しか残っていません。

では、実際にどんな物が残っているかと言いますと、これは『山名宗全細川勝元確執の図』（図1）という錦絵で、そこに山名宗全が描かれています。鳥取市の歴史博物館が持っている応仁の乱に関する錦絵です。実は私、11月に鳥取で講演したのですが、その時に鳥取市歴史博物館の方とお話ししたのですが、最近この絵の問い合わせが非常に増えていて、写真を使わせてもらえないかという問い合わせが沢山あって、急に有名になったということです。

もう一つは、これも江戸時代のものですが、国立国会図書館が持っている『本朝百人武将伝』（図2）といって、つまり日本の有名な武将を百人集めて、その人たちの紹介や説明をしている本ですが、その日本を代表する有名な武将百人の中の一人として、山名宗全が選ばれていて、宗全の絵が描かれています。

しかし、何れの絵も江戸時代に描かれたもので、山名宗全その人本人を見て描いたものでは無いので、当然、想像で描いているのですが、江戸時代の人から見ても山名宗全という人は非常に強面な、ちょっと悪い感じの人というイメージであったことが分かるかと思っております。

『塵塚物語』の逸話「山名宗全、或る大臣と問答の事」

そのほかに、宗全の人物像を物語るエピソードとして有名なのは、お手元の資料の最初のページに載せましたが、『塵塚物語』という史料に書かれたものです。戦国時代の天文21（1552）年に作られた本なので、これも応仁の乱の勃発から90年近く経ってから書かれた本ですが、全6巻65話の一番最後に山名宗全に関するエピソードが載っています。

それは、「山名宗全、或大臣と問答の事」というエピソードですが、

「山名金吾入道宗全、いにし大乱の比をひ、或大臣家にまゐりて、当代乱世にて、諸人これにくるしむなど、さまざまものがたりして侍りける折ふし、亭の大臣ふるき例をひき給ひて、さまざまかしこく申されけるに、宗全たけくいさめる者なれば、

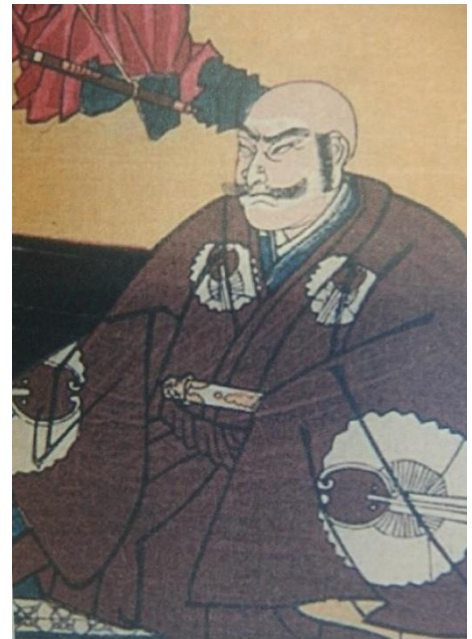


図1：山名宗全細川勝元確執の図
(鳥取市歴史博物館蔵)



図2：『本朝百人武将伝』
(国立国会図書館蔵)

臆したる気色もなく申侍るは、『君のおほせ事、一往はきこへ侍れど、あながちそれに乗じて例をひからせらるる事しかるべからず。凡そ例といふ文字をば、向後は時といふ文字にかへて御心えあるべし。それ一切の事はむかしの例にまかせて何々を張行あるといふ事、此宗全も少々はしる所也…（中略）凡そ例と云は其時が例也。大法不易、政道は例を引て宜しかるべし。其外の事、いささかにも例をひかるる事心えず、一概に例になづみて、時を知らざるゆへに、あるひは衰微して門家とぼしく、あるひは官位のみ競望して其知節をいはず、此くの如くして終に武家に恥かしめられて、天下うばはれ媚をなす。若しみて古来の例の文字を今沙汰せば、宗全ごときの匹夫、君に対して此くの如く同輩の談をのべ侍らんや、是はそも古来いづれの代の例ぞや、是則時なるべし…（中略）いまよりのちはゆめゆめ以てこころなきゑびすにむかひて、我方の例をのたまふべからず。もし時をしり給はば、身不肖なりと云ども宗全がはたらきを以て尊主君公みな扶持したてまつるべし』と苦々しく申ければ、彼大臣も閉口ありて、はじめ興ありつる物がたりも、皆いたづらに成けるとぞ、つたえきゝ侍し、是か非か

（『塵塚物語』）

《大意》

山名宗全は応仁の乱の頃にある大臣の邸に行つて、昨今世が乱れている事について語つた事が有つて、大臣の方は「昔はこんな事が有つた。」「あんな事が有つた」「昔の例によればこうだつた」と色々賢く語つたが、それに対して宗全は、まあ、あなたの言っていることも分かる。しかし、たしかに一理あるのだけれども、昔はこうだつたというのは良くない。これからは昔の「例」ではという言葉に代えて、「時」という言葉を使いなさい。「例」と言つてもそれは其の時の例で、昔の例が今の世の中にそのまま通用するという事では無い。あくまで其の時の例であつて、時代が変わつて社会が変わつたら、そんな物は意味が無くなるのだ。だから例にばかり拘るべきでは無い。あなたたち、即ち公家貴族たちはそう言つた時代の変化というものをきちんと認識せずに例にばかりとらわれていたから、武士に天下を取られてしまったのでしょ。そもそも私（山名宗全）のような身分賤しき武士が、大臣と対等に語り合うということが昔は有りましたか。そんな例は無いでしょ。これこそが時というものです。もう例に拘るのは、やめるべきです。あなたが現実を見て、今現在の世の中の流れに適応しようとするなら、わたくし宗全があなたをお助けしましょう。と言つて、完全に大臣の方がやり込められてしまい、大臣は黙りこくつてしまった。

これは有名な逸話でご存じの方も多のですが、ここで描かれている宗全は、昔の例やしきたり、秩序やルール等はどうでもよく、今現在の時代に適応することが大事であり、旧来のしきたりに縛られない変革者のイメージが強く出ています。

勿論、これは宗全が死んでから何十年も経つてから出来た本に書いてある話なので、これが本当の話かどうかは分からないのですが、少なくともこの本が成立した戦国時代の人たちは、山名宗全というのは旧来のしきたりとかルールに拘らない人だと思つていた。

「赤入道」

もう少し宗全が生きていた時代に近いもので、山名宗全についてどのように言つているかという、資料にあるように宗全は「赤入道」とあだ名されていたようです。

『続郡書類従』の「山名系図」には、

「宗全の面色、甚だ赤し。世人呼んで曰く、赤入道」

というように書いてある。それから、応仁の乱について書かれた軍記物である『応仁別記』の中では、細川方が山名の邸に矢文を打ち込んで山名を挑発するのですが、その文面

サンプル版のため 以降のページ中略

山名会歴史講演会

呉座勇一先生御講演の
『山名宗全の虚像と実像』講演録
についてお問合せ等は・・・

[メールフォーム](#)

又は下記、山名会事務局へ

全国山名氏一族会

事務局：〒667-131 兵庫県美方郡香美町村岡区村岡 2365 法雲寺内

電話：0796-98-1151 FAX：0796-98-1161

山名会ホームページ www.yamana1zoku.org